

## 翻訳 「ボアズの片腕としての歳月」に見るミードの想い

その他のタイトル	A Translation of Margaret Mead 's Article on Ruth Benedict ' s Years as Franz Boas ' Left Hand
著者	菊地 敦子, 福井 七子
雑誌名	関西大学外国語学部紀要 = Journal of foreign language studies
巻	14
ページ	77-94
発行年	2016-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/10203">http://hdl.handle.net/10112/10203</a>

## 「ボアズの片腕としての歳月」に見るミードの想い

### **A Translation of Margaret Mead's Article on Ruth Benedict's Years as Franz Boas' Left Hand**

菊 地 敦 子      福 井 七 子  
Atsuko Kikuchi      Nanako Fukui

The translation of the massive 583-page book “An Anthropologist at Work” was started by Professor Fukui and myself towards the end of 2009. It has been a slow process, finding time between our other university commitments, but we have now translated about two-thirds of the book. The book has never been translated into Japanese before, probably because of its sheer volume. Some may wonder why we are translating this book that was first published back in 1959. This is a legitimate question because most translators choose to translate books that have been published more recently. We feel, however, that the content of this book is as relevant to our society today as it was back in 1959. Today, we live in a society facing constant fear of the unknown. The so-called “Islamic State” is something that most of us do not understand and is something which we simply label as “evil”. However, if we look back into history, Japan was once considered an “evil state” by the people of other countries. But in those days of World War II when discrimination against the Japanese was rampant, there was an anthropologist who took the time to meticulously collect data about the unknown and who tried her best to examine the Japanese mind without any bias. That was Ruth Benedict. For that, we think that it is well worth translating this book now. Her writing teaches us how important it is for us, as scholars, to maintain an open mind, and how we have the duty to prevent our society from rushing into mass hysteria against the unknown.

The particular chapter we translated for this article describes the days towards the end of World War II when the US was anticipating Japan's defeat and was getting ready to occupy Japan. The US at the time had the good foresight to employ many anthropologists to study their enemy before they put together their policy on how to occupy Japan. The events of this period are described in this chapter by Margaret Mead. It is clear from the writing that at a time when the public mind was filled with emotional bias and discrimination, anthropologists (and linguists) did their best in maintaining an objective, scientific view. At the same time, however, we find in Mead's writing, some of her personal issues finding its way into the way in which she describes the course of events. Although Mead describes in great detail the important role played by anthropologists at the time, she merely skims over how Benedict came to be involved in her research on the Japanese mind. The reason for this is described in the introduction preceding the translation.

## キーワード

フランツ・ボアズ、ルース・ベネディクト、マーガレット・ミード、文化とパーソナリティ  
ー学派、戦時情報局、第二次大戦中の文化人類学者の役割

本翻訳は、文化人類学者マーガレット・ミードが友人であり、師でもあったルース・ベネディクトの死後10年を経た1958年にベネディクトが遺した日記、書簡、詩、そして幾つかのフィールド・ワークの地からの往復書簡や覚書を、ミード独自の視点で*An Anthropologist at Work*として纏めた一部“The Years as Boas’ Left Hand” (*An Anthropologist at Work*: 1965: 341-355) 「ボアズの片腕としての歳月」の翻訳である。この章はベネディクトが書いたものを説明・解釈するといったものではなく、ベネディクトとボアズの師弟関係の有様、そしてベネディクトの彼に対する尊敬の気持などが書かれているだけでなく、実際にベネディクトのそばに寄り添っていたが故に理解できる彼女の苦悩についても詳細に語られている。結婚していることで文化人類学の分野でポジションを得ることのむずかしさ、厳しさについてである。それを直接ボアズに訴えることができないうが故のベネディクトの苦悩の様子がありありと描かれている。

太平洋戦争が始まることで文化人類学者の多くが戦時情報局 (Office of War Information) に駆り出されたこと、またベネディクトが日本文化研究を開始するに至った経緯などもミードの視点から書かれている。それがために*Anthropologist at Work*のなかではこの章は異色の箇所として注目されてきた。

実際、「フランツ・ボアズの片腕としての歳月」は実に興味深い章である。なかでもベネディクトがどのような経緯で日本研究を始めることになったのかという箇所は、ある意味いつも議論の的となってきた。それは次の箇所である。

ニューヨークで一緒に仕事をしていた人たちは、一人ずつ戦争に巻き込まれていった。1942年の1月、私 (訳者注: マーガレット・ミード) はナショナル・リサーチ・カウンシルで働くためにワシントンに行った。同じ年の春、ジェフリー・ゴラーは戦時情報局に行った。エドモンド・テラー、ラディスラス・ファラーゴ、そしてローレンス・フランクはそれぞれ政府機関に行った。グレゴリー・ベイトソンはニューヨークにある近代美術館での戦時中のフィルム・プロジェクトに加わり、……ジェフリー・ゴラーは第二文化の子どもたち、そして出版された資料を使ってビルマ人に関する本を書いていた。……1943年の夏、私は戦時情報局の講演のために、そして文化人類学を応用して異文化理解をさらに進めるために英国へ行った。グレゴリー・ベイトソンは日本関連の仕事をするため戦略局 (Office of Strategic Service) に入った。ジェフリー・ゴラーはイギリス大使館の戦時スタッフに移り、ベネディクトは戦時情報局で彼の後任となった。 (*An Anthropologist at Work*: 1965: 352)

私の友人で、ルース・ベネディクト研究で将来を嘱望されていたにもかかわらず、今年の夏突然亡くなってしまった龍谷大学教授であったポーリン・ケント氏は、話がこの箇所、つまり「ベネディクトは彼の後任となった」に及ぶと、いつもは冷静で沈着な彼女が、若干声を荒げて、「ベネディクトはゴラーの後任として雇用されたわけではない」と語っていたことが思い出される。ケント氏の考えを説明すると、「戦時情報局への誘いについて、マーガレット・ミードは、ジェフリー・ゴラーが自らの後任としてベネディクトを指名した、と書いている。たしかにゴラーは戦時情報局で文化とパーソナリティーの研究を行っていたが、イギリス大使館の政府間交渉の仕事につくために戦時情報局を去った。しかし、ベネディクトは彼の後に戦時情報局に入ったが、単にゴラーの代わりに入ったわけではない。」（ケント：1997：183-184）

ミードが「彼の後任となった」と書いた部分で用いた英語は“replace”であった。Replaceには継続性の概念は含まれていないと考えるのが一般である。*An Anthropologist at Work* はミードの手によってベネディクトの苦悩と戦いの人生がまるで聖人の趣きさえ感じさせる名著に仕上がっている。しかし、ベネディクトの日本研究に関する箇所についてはミードの異なった側面が顔を出す。マーガレット・ミードはベネディクトが日本研究を開始し、水を得た魚のように報告書や覚書を次々に書いていく、かつて自分が知っていたベネディクトとはまるで違う姿をみた時、嫉妬、そして怒りに近いものを感じたに違いない。あれほどベネディクトのすべて、私生活、研究活動の面でもお互いのことを熟知していると信じていたにもかかわらず、ベネディクトは日本研究についてはミードに何も知らせなかったからである。ケント氏を通して翻訳することの怖さ、一言の重みを知らされたと同時に、replaceを用いたミードの心理をも垣間見る思いであった。ゴラーとベネディクトの戦時情報局との関わりについては拙著『日本人の性格構造とプロパガンダ』を参照願いたい。しかし結論だけ言うとベネディクトはゴラーの後任として戦時情報局に関わったわけではなかった。

ケント氏とのもうひとつの思い出も書いて置きたい。私たちは1997年にNHKブックスから『日本人の行動パターン』を出版した。これはベネディクトが戦時情報局にいた時に書いたレポートのひとつであり、これがベースとなり後に『菊と刀—日本文化の型』が誕生するのである。ケント氏とは翻訳の過程から一緒に仕事をした。そして解説も書くことを要求された。それまで私たちはお互いの存在すら知らなかった。私たちは全く別々にベネディクト研究をしており、ヴァッサー大学のベネディクト・コレクションでの資料調査もそれぞれお互いの存在を知らずに行っていた。しかし、偶然私たちは二人ともベネディクト研究をしていることを知った。ヴァッサー大学の資料のなかにドナルド・キーン氏からのベネディクトへのファン・レターのようなものを、それもオリジナルで発見したのも私たちであり、発見した時は同じではなかったが、おそらく驚きとうれしさは二人だけに共有できるものだったのではないだろうか。その時の感動は筆舌に尽しがたいものであった。ケント氏が亡くなった後、彼女のご主人にお目にかかったが、思い掛けない話をお聞きすることができた。実は、『日本人の行動パターン』を書

いた後、キーン氏から電話があったそうである。おそらく、キーン氏はご自分の書かれた手紙が残っていることなど考えもされなかったに違いないし、その手紙がどこにあるのか、どんな内容であったのかも詳細は憶えてはおられないだろう。二人だけが経験した発見の喜びは、何にも代えがたいものであった。そしてその手紙のなかで感じたのは、青年時代の感性豊かなドナルド・キーンであった。

閑話休題。なんといってもこの章の中心はボアズについての箇所であろう。ボアズを取り巻くコロンビア大学の文化人類学者たちがヴィヴィッドに描かれている。殊にこの章はボアズの死に至る箇所が書かれている。晩年の私生活では決して幸福とは言い難いボアズであったが、死の直前まで人種問題を科学的に分析しようともがいていた。そして1942年12月29日、コロンビア大学の教員クラブでの昼食会の席上、「人種に関して新しい理論を発見した……」と発しながら亡くなってしまった。

彼の死は非常に大きな損失であった。しかし、彼のもとで育った文化人類学者たちはそれぞれの道で活躍していくことになる。サピアは言語学者として、ベネディクトは最終的にはコロンビア大学の正教授として、またマーガレット・ミードは女性の新しい生き方の手本として大きな影響を与えることになる。ボアズの遺志はいやまに広がりを見せ、多くの仲間たちによって世界に羽ばたいていった。

#### References

Mead, Margaret. *An Anthropologist at Work: Writings of Ruth Benedict*, New York: Houghton Mifflins, 1965

ケント・ポーリン 『日本人の行動パターン』NHK ブックス 1997年

福井七子 『日本人の性格構造とプロパガンダ』ミネルヴァ書房 2011年

## ボアズの片腕としての歳月

マーガレット・ミード

1921年にルース・ベネディクトがコロンビア大学に入学した時から、ボアズは彼女の能力に対して積極的な感心を示していた。1923年2月9日付けのエルシー・クルー・パーソンズへの手紙<sup>1)</sup>のなかで、以下のように述べている。エルシー・クルー・パーソンズは南西会（the Southwest Society）という機関を通して気前よく寄付をしていたが、その機関を通すことで寄付は正式なものとなっており、匿名の寄付ではなかった。

親愛なるエルシー

アシスタントを見つけたいというあなたの願いについてさらに考えをめぐらせました。どのようなかたちでそのアシスタントを雇うのか、違う方向で考えてみてはいかがでしょう。つまり、南西インディアンの問題を解決しなければならないのですが、私たちはそれに取り掛かる時間がないので、この問題を自分一人で解決することができる人、また昨日あなたがおっしゃっていた系図に関するノートを整理することもできる人を見つけるということです。私が考えているのは比較神話の問題をテーマとすることです。この提案の利点は、私たちが抱えている若い文化人類学者に研究のチャンスを与えることができるということです。それによって私たちの研究が将来発展していく道を作ることになります。

このような案に賛同していただけるなら、ベネディクト夫人をあなたがお考えのアシスタントの候補者の一人としてあげたいと思います。

パーソンズ夫人は翌日返事を書いている<sup>2)</sup>。

ボアズ博士へ

ベネディクト夫人に関するご提案、気に入りました。私が個人的に必要としていた仕事とは少しはずれます。私が考えていたのは単なるコピーをする人で、そのような仕事は彼女には与えられないので、おそらく他の人を探すことになると思います。でも、神話に関する仕事、そしてロイヤル・アンソロポロジスト・インスティテュートに送る予定の親族用語の作業がかなりあります。そしてもちろん他の分野の課題も増えることと思います。もしベネディクト夫人がすぐにも比較神話に取り掛かれるのであれば、あなたのケレスン（訳者注：ケレス語。いくつかのプエブロ族によって使われていた。）テキストに出てくる参考文献が使えるのではないのでしょうか。

ベネディクト夫人に聞いてみてください。たとえば時間とか、お金のことなど。

これによってベネディクトは初めて文化人類学の仕事で支払いを受けた。

彼女とパーソンズ夫人の関係は決してスムーズではなく<sup>3)</sup>、たいていの場合ボアズを通してその関係は保たれていた。ボアズとベネディクトの書簡のやりとりは、パーソンズ夫人の研究方法のややこしさに対する懸念や嘆きでいっぱいであったが、彼女の気前のよさも手紙に書かれていた。いつでも当てにできるその気前のよさは、多くのフィールド・ワーカーに利益をもたらした。しかし、パーソンズ夫人は独特の気質をもっていた。パーソンズ夫人は初稿のあとに内容を完全に書き直すくせがあり、出版社はその資金繰りに苦労していたが、その資金の多くをパーソンズ夫人から受け取っていたので編集長にとっては大変悩ましいことだった。また、パーソンズ夫人はベネディクトの方法論がボアズの方法論に忠実に従っていると理解していても、ベネディクトに対して冷たくあたり、状況を益々やりにくいものにしていくようにしていた。パーソンズ夫人に対するベネディクトの不満は、ベネディクトが書いた、パーソンズ夫人の『プエブロ族の宗教』に対する書評<sup>4)</sup>の口調に見え隠れしている。

当時の厳しい経済状況では、仕事はお金を必要とする人のためのものであった。コーネル医科大学の教授夫人にとってお金は必要ではなかった。バーナード大学でのポジションはベネディクトにとってうってつけのポジションであったが、ボアズはそれをグラディス・ライカードに与えようとしていた。ライカードは結婚しておらず、仕事が必要だった。また、ベネディクトはフェローシップの公募に応募するには年をとりすぎていた。35歳が年齢の上限であった。スタンリー・ベネディクトは基本的に彼女が仕事をするに対して嫌悪感を持っていたため、彼とルースとのコミュニケーションはいつも重々しく、難しかったのだが、それがさらに困難となった。ルースは、文化人類学の研究をするための生活費は自分で稼がねばならないと思っており、スタンレーにそれを負担してもらおうとは思っていなかった。1926年には、ルースが他の町で教えてなければならぬ可能性が生じ、週末を一緒に過ごすために電車ではなく、飛行機で帰宅することまで彼らは話し合っていた。しかし、ボアズ目から見れば、彼女は人の妻であり、十分に養ってもらっており、奥さんとしての義務もあるので、少しの給料で彼女の才能を生かす仕事を見つけてあげなければならぬと思っていた。そのため彼女に対して過度な要求をせず、世話もしなくてもよいと考えていた。

ボアズが抱えていた責任は、網の目のように彼を取り囲んでいた。彼の頭のなかには、原始社会の消えゆく資料があり、何十人もの研究協力者のまだ出版されない研究があり、追放された人たちの経済的ニーズをどのように満たせばいいのか、また無責任な人たち、あるいは身体障害者をどのように扱えばいいのか、出版のための予算をどのように見つければいいのか、編集のための時間を作らねばならないこと、自分が持っている膨大な資料を論文に書き上げることといったことがあり、忙殺されていた。彼の助けなしに自分一人でやっていけるような人は、彼にとっては救いであった。私自身も彼の学生だった時、そして後に彼のインスピレーションと指示のもとで研究していた間もふくめて、6度くらいしか彼と会うことはなかった。何とか

時間が作れた時には、彼はため息をつきながら、助けや指導や指示が必要な人たちの話を聞いた。しかし、その人に対して責任がないと感じた時には、その人たちは極端にないがしろにされたのである。

1923年にベネディクトがボアズに書いた手紙からは、すでにベネディクトとボアズの知的関係が育まれていることが窺える。ベネディクトが資料を整理しながら、ボアズの考えに思いをめぐらせている様子がその手紙から読み取れる。1922年の夏にセラノ族を調査するためのフィールド・ワークに出かけた後、ルースはウネペソキー湖の湖畔にある別荘でスタンレーとともに過ごした。そこから彼女は9月に以下の手紙を出している<sup>5)</sup>。

……夏の間中、神話の研究をしており、神話のなかにあらわれる問題となるような偶発的な出来事について先生はどのように思われるだろうかと考えない日はありません。かなりの資料を集めたのですが、まだ分析を始めてはおらず、要約もまだ試みてはいません。翻訳されていない物語を読むためにスペイン語も学んでいます。そうなる先生はご存知だったのでしょうが、私に気づかせようとなさった先生の戦略を思い、思わず微笑んでしまいました。……

彼女は1923年の秋に帰ってきて、コロンビア大学の図書館で神話の索引集に取り掛かった。様々なインディアンの部族の民話に表れるテーマや出来事を何千もの紙に書き出し、これらの紙は現在では茶色く、ぼろぼろになっている。それは以下の形で書かれている。

O Kanagon	MAFLS11 : 92
1) Thompson · MAFLS6 : 56 : JES : 229, 338 : Shuswap	J E2 : 669
Fraser Delta-Boas-Sagen 42 : Lillovet	JAFL25 : 229 Carrier
TC15 : 125	
3) Bol & Pol 2 : 318, 516-Quebec	JAFL29 : 37, 41

この作業が耐えられなくなると、彼女はまだ作業中の親族構成に目を向けた。それはチェスのゲームを再現するのに似た仕事で、しかもコマがいつどのような動きをしたのか一部の情報しか与えられないまま、全体を再現するような仕事だった。ベネディクトが不完全な資料に自分の手を加えて整理する能力を磨いたのはこの時期であった。

文化人類学部は昔のジャーナリズムが入っていた建物の小さな狭い一角にあった。二つの研究室とすべての授業が行なわれるセミナー・ルームが一つあるだけだった。そこで学生が授業の合間に作業をしていた。1922年9月にボアズはベネディクトへの手紙<sup>6)</sup>のなかで、エレベーターが壊れているが、7階まで階段を使って上がろうとしないようにと書いている。ベネディ



クトの優しく、穏やかに人を迎え入れる性格は、彼女の学生のみならず他の学生からも親われた。学生は、色々なことを話すために彼女の部屋を訪ねた。ベネディクト以外の教授連中は、初めて話す相手に対して素っ気ない先生が多かった。マリオン・スミス博士は初めてボアズと話したときのことを次のように語っている。ボアズは授業の後に彼女を引き留め、毛むくじらの眉毛の下から鋭く彼女を見つめた。彼の眼差しは、涙目によって益々怖い表情になっていた。ボアズは彼女に次のように言った。「原始芸術か原始宗教の仕事をするべきです。」それしか言わなかった。そうしたことがあると、学生はベネディクトのところに行って、ボアズの言った言葉の意味を聞いたものだった。すると大抵の場合、ボアズは彼が抱えている心配や希望をすでにベネディクトに話していることが多かった。ボアズはベネディクトといっしょにウエスト109番通りにあるストックトン・ティールームで毎週行われる文化人類学の昼食会に歩いて行き、二人はすぐに話し始めるのだった。

バーナード・カレッジ卒業のエスター・シフ・ゴールドフランク、そして後にルース・ブントゥェルらが秘書という立場から学生というもっと親密な立場に変わることによって、学部の雰囲気は徐々に人間的になっていった。彼女たちはボアズと同じくドイツ系ユダヤ人で、最初は遠くて、怖い存在であった教授殿はみんなからパパ・フランツと親しまれるようになった。ボアズはベネディクトへの手紙の最後に、「パパ・フランツより」と書くこともあった。後に二人が同等のパートナーのようになると、「フランツ・ボアズ」とサインするようになった。

多くの人々が「ボアズ学派」について語るが、実際にはそうしたものはなく、彼には彼を崇拜するような人も弟子も、無条件で彼を受け入れるような協力者もいなかった。ボアズが学生に与えた厳しい訓練は、自分たちの足でしっかり立つようにという目的で設計されたものだった。例えば、ボアズが管理する立場にある時、編集長だったり、あるいはどこかに探検に行く時のアドバイザーだったり、予算申請の審査員だったりした時は、彼は決して基準を下げるようなことはせず、厳密さを保ち、反対者に屈することはなかった。ボアズの掲げる高い基準はアメリカ文化人類学の間で広まった。彼が直接それを行行使うことはめったになかった。しかし、まず事実を十分に集めるという彼の研究基準は人々の脳裏に焼きついた。それはたいてい彼と直接会うことによる影響だった。なぜなら出版された彼の論文からはそれを窺い知ることはできなかったからである。ゴールデンワイザーとウイスラーが一般書を出版した時、私たちの小さな文化人類学の世界にいる人たちは、かたずをのんで見守った。なぜならボアズは「一般化」を信じないと聞いていたからであった。しかしボアズの方法論に象徴された彼の支配的な性格は孤独なものであった。彼を崇拜し、手をさしのべる学生にさえボアズは驚くほど距離を保ったのである。1920年代初頭、プリニー・エール・ゴダードはインテリぶった怠け者になりかけていた。南西地方で快適な夏を過ごしたにもかかわらず、何も書かなかった。彼は誰からみてもボアズに対して忠実な弟子のようになり、ボアズの意見を無条件に受け入れ、センチメンタルな忠誠心を示した。ボアズは、そんなゴダードを家族の女性の愛を受け入れるかのように、

少しはにかみながら、温かい微笑みで受け入れた。パーソンズ夫人とボアズとの関係は少し距離があった。ボアズがケレスに関する研究を彼女に捧げた時、パーソンズ夫人は1927年11月4日<sup>7)</sup>付けの手紙で以下のように書いている。

敬愛なるボアズ博士：

ケレスの文書を私に捧げたいという願い、そして先生の献辞をお聞きし、とても喜んで  
います。喜ばない人がいるでしょうか。いつも申しておりました通り、私は褒められるの  
が好きです。お友達や男の子から褒められるのが好きです。そしてそのような褒め言葉に  
値するかどうかは考えないようにしております。

グラディス・ライカード、ルース・ブンツェル、そしてエステル・ゴールドフランクは娘の  
ような立場となり、ボアズは彼女たちの仕事に関することや個人的な問題に対して心配性のお  
父さんかおじいさんのように彼女たちのことを気にかけた。

しかし、ルース・ベネディクトは彼女たちとは少し違うカテゴリーに入っていた。彼女は部  
外者として外から入ってきて、ボアズからの手助けも求めず、ボアズが彼女の責任をとるこ  
とも期待せず、同時にボアズの男子生徒がよくやったように、断固として彼に反対したり、嫌々  
ながらボアズの意見を受け入れたりするようなこともしなかった。ボアズとベネディクトの関  
係は、二人の全く異なる過去を映し出しているところがあった。ベネディクトは子ども時代か  
ら年老いた男性は、賢く、そして死に近い存在であるというイメージをもっており、ボアズは  
子ども時代、友達と会うことはめったになく、欲求不満の幼少時代を過ごした。ボアズの長男  
は医者になり、二番目の息子は1925年に列車事故で亡くなった。自分の娘たちの夫に対するボ  
アズの関心から推察すると、ボアズはヨーロッパのユダヤ人文化に則って、自分の後継者に息  
子ではなく義理の息子を考えていたのではないかと思わざるを得ない。しかし、ボアズが何度  
彼らを自分の仕事に引き込もうとしても、彼らはボアズの仕事に興味を持たなかった。

時間においても空間においてもボアズの文化人類学の領域は膨大な広がりを持っており、そ  
のうちの数箇所しかまだ明かりが灯されてはいなかったように思えた。ボアズが死んだ後には、  
それらすべてを統括できる人は彼以外にいないのではないかという思いが私たちにあった<sup>8)</sup>。  
言語学、民族学、考古学、自然人類学といった分野で研究がなされており、ボアズは彼らと活  
発に交流をもっていた。これらの分野のための予算を獲得したり、研究計画をたてたり、自分  
の良心に従い、何の呵責もなく、酷評を書いていた。

ルース・ベネディクトは徐々にボアズの分身のような存在になっていった。彼女はボアズと  
は異なり、数学や物理的成長の研究にはほとんど興味がなく、聴覚障害のため、言語学的研究  
はできなかった。ボアズの広い学問的領域をすべて共有することはできなかった。しかし、  
民族学、そして学生、また方法論においてはボアズと同じように責任感をもっていたが由に、

彼の分身のような存在となった。ボアズは、フィールド・ワークの問題をベネディクトとともに話し合ったり、論文をみて、それをどう扱うべきかについて話し合ったり、少量の生活費が世界の果てまで届くように手配することをベネディクトに頼むこともできた。学生の行動に問題があった場合、ボアズはそれについてベネディクトと話し合うことができ、何か気に入らないことがあると、それを彼女に伝えることができ、誰かを馬鹿呼ばわりしておきながら、科学誌でその人の論文を信じられないくらい真面目に審査し、そのすべての過程において彼女に誤解されずに自分の気持ちを伝えることができた。ボアズは自分の授業のほとんどをベネディクトに任せていたが、1930年までベネディクトは講師の立場でしかなく、時には少しの収入になることもあったが、時として全くないこともあった。ベネディクトは一生懸命に働きボアズに忠実でいたにもかかわらず、彼女が後に解釈している通り、ボアズにとって彼女は基本的には遠くからきた訪問者でしかなく、いつかは去っていく人だったのである。

ルースとスタンレーの苦しくじわじわと離れていく過程が、1930年についに別居に至った。自分たちの気持ちが離れているのを止めるためにあらゆる手立ては尽くされた。そして彼女たちは別居することになった<sup>9)</sup>。この時点でベネディクトはボアズに仕事の地位と、それに見合ったなんらかの報酬が必要だと要求し、ボアズもそれを認めた。必要になった時点で、ボアズは彼女のために助手のポジションを獲得し、1936年、彼女は準教授となった。これでやっと彼女は大学に残るといえることがはっきりした。

その間、年月はボアズにとって厳しいものとなった。1925年10月、二番目の娘が小児麻痺で亡くなり、二番目の息子は交通事故で亡くなり、ボアズ夫人は1930年12月に車に轢かれて亡くなった。その時、ボアズはシカゴ大学の社会科学学舎の落成式のためシカゴに行っており、ボアズ夫人が埋葬される前の一晩だけしか彼女の側で過ごすことができなかった。シカゴからニューヨークまでの長い列車のつらい時間をボアズはサピアとともに過ごした。1931年と1932年、ボアズは深刻な病いを患っていた。そうした時、すべてのことがベネディクトの双肩にかかってくる。ボアズがもう原稿を見ることさえしなくなり、様々な課題に取り組むことができなく、色々なことから退くと思われるようになり、手紙はベネディクトに宛てられるようになった。

その頃ヒットラーが政治的成功をおさめた。それはボアズが生涯戦ってきたすべてのものを象徴するようなこととなり、普遍的な人間の価値観と自由を否定することと結びついた。生涯の最期の何ヶ月かの間に、ボアズは非常に大きな怒りによって奮い立たされ、世界とまた関わるようになった。文化人類学の仕事にも復帰し、人種のテーマのみならず、反ナチの軍事的活動、書物、そして地下組織の資料を収集したり、追放された人たちのために活動するようになった。疲れも厭わず、ボアズは一度なくなりかけた力を、彼が第一次大戦でドイツ系アメリカ人として直面した戦いとは逆の戦いに注ぎ始めた。

ボアズがこのように急に活発になったことは、ベネディクトに新しい問題を投げかけた。戦争放棄と個人の保護のために戦う理由はあっても、その他の理由で戦う理由は、彼女には見つ

からなかった。『文化の型』<sup>10)</sup>を書いて文化人類学に対するコミットメントが強くなってきたところであり、ボアズが以前から言っていたテキスト<sup>11)</sup>を書く準備がやっと始まり、彼の研究方法が一般に知られるようになった段階で、彼の興味は倫理の戦いにシフトしてしまったのである。1934年にベネディクトは私（訳者注：マーガレット・ミード）に次のような愚痴をこぼした。「彼は正義の仕事のために科学を投げ出した。何ともったいない。」ボアズの変貌ぶりは、特に彼女が過去に彼を助けた事柄、たとえばフィールド・ワークのための資金集め、フィールド・ワークの文章書き、学生のための就職斡旋、出版のための支金集めといったことに悪影響を与えた。不況の時期、一年間で大学院に関する問い合わせが一件もないこともあった。ベネディクトが自由に使うことができるすべての支金は、学生の乏しい収入を内密に補うために使われた。

最初はゆっくり、そして少しずつ明確なかたちで彼女も世界を取り込んでいる話題の緊急性に目覚め、文化人類学者としてそれに参画する義務があると感じ始めた。彼女は単なる一市民として参加することはなく、（その目的に対する不信感が少し残っていたのかもしれない）、絶えず一人の文化人類学者として参加した。このようにして、人種と、もっと広い意味での民主主義に関する問題点を扱った何年もの積極的な研究が始まった。

ボアズは学問の自由と民主主義のアメリカ協会の会長であった<sup>12)</sup>。ベネディクトもこの委員会で働き、同じような他の組織でも働いていたが、そのうち幾つかは、今では有名になったUnited Frontの戦略として共産主義者によって功名に操られているような組織であった。ボアズは簡単に共産主義者を見抜くことができると信じていた。共産主義者は独立した考えを持つ能力をもってはおらず、それはどのようなことをしても見破ることができると彼は信じていた。ボアズは自分が関わっている運動に対する抗議を極度に嫌い、その態度によって共産主義者の手法を学ぶ機会を逸した。ベネディクトはボアズと比べるとその時代の風潮をもう少し理解していた。彼女は自分が接する人たちの何人かは共産主義者であることを知っていたが、彼らの教義で言われていることをまともに受け取る必要はないと思っていた。もし彼女の友達が共産主義者になったとしたら、ベネディクトは、まあ仕方がないわという調子でクリスチャン・サイエンスやアングロカトリック主義や心理分析といったものに傾倒していく人たちと同じように扱ったに違いない。そのため、ベネディクトは、ボアズが右翼からの攻撃を嫌っていたのと同じくらい、非正統派で不満を持っている左翼からの攻撃を嫌っていた。彼らは人助けをしようとしている人たちを共産主義者と呼んで名誉を傷つけようとしていた。ベネディクトが自分の身を守るための予防措置をとるようになったのは、ワシントンで自分のアシスタントの身上検査や保安に関するいざこざを経験してからであった。20世紀においては悲しいことにとらなければならないような予防措置を彼女はとるようになった。そして、ウオラス指揮下の委員会が許可なく彼女の名前を使った際には、抗議文を書き、そのコピーを保管するようになった。しかし戦争前にボアズとベネディクトは、「スターリン主義者」が支持する考え方であることを

恐れて何もしない人たちに一瞥のまなざしを向けながら、先頭に立って、人種に対する偏見、差別、言論や報道の自由の弾圧と戦った。

1937年にボアズは引退した。継続的なナチスの脅威によって確固たる目標を与えられ、ボアズは引退後の6年間、追放されたドイツ人のための活動と自分の資料の研究という二つ大変な仕事を両立させた。学部は困難な時期に突入した。それは学部を作り上げた偉大な人が若い人にとって代わられる場合に起こる避けられない状況であった。ボアズは名誉教授の地位を得て、週に1～2回は自分の研究室に顔を出した。

ボアズが辞めた後、ベネディクトは非常に困難な立場に立たされた。彼女はボアズのために学部の仕事をしてきたため、ボアズ側の人と見られていた。それと同時に、新しく来たラルフ・リントンといっしょにやっていかねばならなかったのだが、彼は新しい地位に就いたばかりでまだ落ち着かず、いらついていた。そしてベネディクトが彼をボアズの後任として支持していないことも承知していた。客観的に顧みると、リントンがボアズの後任になる以前は、リントンの考え方はある意味ベネディクトに近いと私たちは考えていた。しかし、学部にはバランスをもたらすには、もっと社会的、構造的なものを強調する人が必要だったのである。ボアズとベネディクトの間で交わされたこの頃の手紙を見ると、その異常な状況が読み取れる。それは彼が活着している間も、そして彼の死後もやわらぐことはなく、リントンがエール大学のスターリング寄付講座教授になっても、ジュリアン・スチュアードがコロンビア大学の教授になったことによってもやわらぐことはなかった。

1939年の夏、ルース・ベネディクトは二つ目の現地調査のワークショップを実施した<sup>13)</sup>。この時はカナダのブラックフット族を選んだ。その後、彼女はカリフォルニアに行き、そこで一年間母親と妹とカリフォルニアの友人と過ごした。その年の冬に彼女は*Race: Science and Politics*<sup>14)</sup>を書いた。それはナチスに脅かされている世界に、文化人類学者が果たさねばならない責務を果たすかのように献身的な気持ちで書かれた。この本はベネディクトがジーン・ウェルトフィッシュと一緒に書いて、1943年に出版された*Races of Mankind*というパンフレット<sup>15)</sup>の前身であり、よりわかり易く書かれたパンフレットと比べて学問的なものであった。

1940年にルース・ベネディクトはニューヨークに帰り、慌ただしくストレスが多い生活に戻った。コロンビア大学の学部内のいざこざ、徐々に失われていくボアズの権限、そして迫りくる戦争のなかにあってもベネディクトは人種の問題に関して文章を書いたり、講演をするという責任は果していた。しかし、それはだれからも受け入れられていたわけではなく、こうしたすべてがすでに崩れかけていた彼女に重くのしかかっていた。次から次に現れる役立たずの人たち、そして彼女に頼る人たち。彼女の重荷はますます大きくなっていった。時間があれば彼女はルース・ヴァレンタインとシェアしていたアパートでシェークスピアを読んだ。ベネディクトは疲れ果てていた。外の生活と内の生活との対立に疲れているのではなく、その時の状況、何かしなければならぬというプレッシャー、文化人類学の現状、そして彼女自身の研究の現

状、こうした外部的要素による時間の分裂に彼女は疲れ果てていた。

この頃、彼女は昔と同じように力はあっても、それを支援してくれる人がいない状況に置かれていた。彼女は非常に尊敬され、様々な分野の人から相談されていたにもかかわらず、学内で閉ざされた生活を送っていた。1941年にプリン・ボアで開催されたアンナ・ハワード・ショー記念講座に招待されるという名誉を受けたにもかかわらず、休みをとるのに苦労しなければならなかった。この記念講演の内容をベネディクトはシナジー（synergy）の概念を中心に構成した。シナジーは一つの文化のなかの幾つかの慣習の相乗効果によって、エネルギーが発散されること、あるいは一つの文化の幾つかの慣習が矛盾したり、くいちがったりすることによって人間のエネルギーを分散させるということである。講演内容の資料として、ベネディクトは1930年代に学生たちが行った一連の現地調査の資料を使った。ベネディクトは何らかの形でこれらの資料を整理し、ゆくゆくは一冊の本にまとめたいと思っていた。しかし結局のところ、彼女はアンナ・ハワード・ショーの講演原稿をとっておかず、また学生の現地調査の資料を整理することもなく、リントンの好きなように資料を使わせることにしたのである<sup>16)</sup>。その間、私たちは確実に迫っていた戦争の準備として文化人類学が貢献できる方法を進めていた。科学と哲学と宗教に関する最初の学会が1939年夏に開催された<sup>17)</sup>。同じ年の秋にアーサー・アパム・ポープが国家倫理委員会（Committee for National Morale）を創設した<sup>18)</sup>。1941年にローレンス・K・フランク、グレゴリー・ベイトソン、エドウィン・R・エンブリーと私は、設立当時異文化関係協議会（Council for Intercultural Relations）と呼ばれ、後にインスティテュート・フォー・インターカルチュラル・スタディー Institute for Intercultural Studies と改称された組織を設立した<sup>19)</sup>。この間ルース・ベネディクトはナショナル・リサーチ・カウンシルの食習慣研究委員会に入らされ、その他の学術協議会にも呼ばれた。また新しく開発された活動にも多少関わった。1941年にベネディクトは、私が第二回科学・哲学・宗教会議のために書いた“The Comparative Study of Cultures and the Purposive Cultivation of Democratic Values”<sup>20)</sup>の書評を書き、1943年に“On Supplementing the Regional Training Curriculum by the Use of Material on the Contemporary Peoples, Their Culture and Character”の報告書<sup>21)</sup>のための準備に協力した。

真珠湾攻撃の日曜日、ローレンス・フランク、グレゴリー・ベイトソンと私が学会に出席していた時、ベネディクトは私に食習慣委員会（Committee on Food Habits）の事務局長の仕事を持ってきた。国家倫理委員会の私たち若いメンバーは、「連邦政府がどのように動いているのかを調べる現地調査員を送り込まねばならない」と思っていたところで、私がおその職を引き受けることでその願いは叶えられることとなった。1916年のワシントンの戦いにおいて予算局など聞いたこともない連中が犯した過ちが繰り返されることを懸念していたからである。当時 Interdepartmental Nutrition Coordinating Committee の会長は、M・L・ウィルソンで、彼はナショナル・リサーチ・カウンシル（National Research Council）のアドバイザー・コミティ

ーの仕事が社会変化の応用を俯瞰する役割をもっていると考えていた。そのためベネディクトは、食習慣委員会の事務局長の仕事は私にとってぴったりだと思っていた。5時に会議を終えて、クローク・ルームに行くと、そこの係りの人が真珠湾攻撃があったことを私たちに教えてくれた。これによって私たちは、すでに準備を始めていたことを次の段階に進めることとなった。

ニューヨークで一緒に仕事をしていた人たちは、一人ずつ戦争に巻き込まれていった。1942年1月、私はナショナル・リサーチ・カウンスルで働くためワシントンに行った。同じ年の春、ジェフリー・ゴラーは戦時情報局 (Office of War Information) に行った。エドモンド・テイラー、ラディスラス・ファラーゴ、そしてローレンス・フランクはそれぞれ政府機関に行った。グレゴリー・ベイトソンはニューヨークにある近代美術館での戦時中のフィルム・プロジェクトに加わり、そこで初めて *Hitlerjunge Quex* の映画に対する集中的文化人類学的分析を行なった<sup>22)</sup>。ジェフリー・ゴラーは第二文化の子どもたち、そして出版された資料を使ってビルマ人に関する本を書いた<sup>23)</sup>。食習慣の委員会ではローダ・メトローがアメリカ文化に関する口頭資料の質的分析法を開発していた<sup>24)</sup>。1942年の短い休暇の間に私は *And Keep Your Powder Dry*<sup>25)</sup> を書いた。1943年の夏、私は戦時情報局 (Office of War Information) の講演、そして異文化間理解のために文化人類学を応用する目的で英国へ行った<sup>26)</sup>。グレゴリー・ベイトソンは日本関連の仕事をするため戦略部門局 (Office of Strategic Services) に入った。ジェフリー・ゴラーは戦時スタッフとしてイギリス大使館に移り、ベネディクトは戦時情報局で彼の後任となった。

そこでベネディクトはその前年にグレゴリー・ベイトソン、フィリップ・モーズリーそして私が作ったルーマニア人の歴史に対する概念の初期研究に出会い、ルーマニアに関する考察を書くためにインタビューや出版資料に着手した<sup>27)</sup>。ベネディクトはこれを1943年の秋に仕上げた。この覚書に関する話し合いはモーズリーとハルがモスクワ旅行から帰った後にした。これがワシントンで行なった幾つもの小さな集まりの始まりとなった。そこで私たちはインフォーマントを使ったり、フィルムや文学作品の内容などを分析することで、他の国の文化的特徴のモデルを構築しようと意見を交換し合った。

戦時情報局でベネディクトは次にタイの研究<sup>28)</sup>を始め、最後に日本研究をした。そして日本研究ではゴラーやベイトソンといった初期の研究を使い、政府の他の機関で行われたアレキサンダー・レイトン、クライド・クラックホーン、カート・レヴィンといった同時代の研究も参考にした。このワシントン時代にベネディクトは新しい友だちを作り、その人たちは後に戦後の研究プロジェクトに加わった。殊に、ネーザン・ライツやニコラス・カラスなどである。

戦時中の警備体制のなかで、ベネディクトはいくつかの争論に巻き込まれた。*Races of Mankind* は議会で反体制的と糾弾された。(その理由は主に戦略的な誤りによるもので、ベネディクトは知能テストで北部の黒人の何人かが南部の白人の何人かより高い成績を取った、と

あからさまに書いたことによる。)そして1939年に彼女の最も期待された学生の一人名であるブエル・クエインがブラジルで自殺し、他の文化人類学の学生のためにかなりの遺産を残したことに対する悪意ある批判と戦わねばならなかった。

1930年代後半の物不足と競走の激しい情勢のなかで、遺産の額は誇張され、ベネディクトはボアズへの手紙のなかで次のように書いている<sup>29)</sup>。「リントンは私が学部の研究費を自分の学生のために使う前にクエインのお金を使わせようとしています。」そして、ワシントンの安全保障会議で、ベネディクトが極秘資料を扱うのに適切な人物であるかどうかの問題となった時、彼女は文化人類学の教授が学生を現地に送り出す時、いかにリスクを負わなければならないかを説明しなければならなかったことを感情的に私に語った。彼女はブエル・クエインのわずかな遺産を手に入れようとたくらんで、クエインをジャングルに送り込んで死なせたのだという同僚によるFBIへの告発があり、それに対して反論していた時これまでのさまざまなことがよみがえってきた。私をサモアに行かせるためのすったもんだ、1931年のヘリエッタ・シユメラーの殺人、そしてジュール・ヘンリーを南アメリカのジャングルに送り込まねばならなかった時の不安などである。彼らにとってブエル・クエインはベネディクトが最も期待をかけていた学生であったことなどどうでもいいことのようにであった。

個人的な恨みや欲、拒絶された関心などが、知っている人や他の破壊分子からのりかえてきた知らない人からの「忠誠心」と混ざり合って、攻撃として表現することが是とされる風潮の中で、ベネディクトは少しずつ自分自身を攻撃から守ることを学んでいった。

その頃彼女は極秘の会議に出席し、戦時情報活動にも参加し、特にヨーロッパの地下活動やゲリラ活動を支援するためにドイツ、オランダ、ポーランドの分野で活動していた。同時に彼女は一人の優秀な秘書と、若い調査団とともに、資料の集中的分析をするという彼女独特の地味な仕事のスタイルを徐々に確立していった。戦争が終わった頃には日本について書く準備が整っていた。

1942年11月、ボアズはアメリカ民族学会(American Ethnological Society)の100周年記念式典で講演をし、そのなかでE・ジョージ・スクワイアーが1869年に書いた情熱的な文章を引用した<sup>30)</sup>。

議員であれ、王様であれ、政治家であっても文化人類学が説く重要な教訓を見過ごすわけにはいかない。文化人類学の発見や結論に合わせて、ヨーロッパの政治改革が行われている。神と人間の関係そして道徳とは全く関係ない儀式的独断主義に陥りがちだった宗教界がそこから解き放たれ、もっと高尚になっている。これは文化人類学の影響にはかならない。

このような素晴らしい結果にアメリカ民族学会はどのような貢献をしたらろうか。20年間、何もしてこなかった。もちろんそのうちの10年間は、この国で科学的追究をする環境



になかったと言える。同じ考えや目標をもった学生たちは、政治的、あるいは社会的隔たりによってバラバラになり、研究者は自分たちがやりたいことから卒業し、あるいは変更し、もっと必要とされる分野に移っていった。しかし離れていった協力者たちは、真実を求めるために昔の共同体や研究に戻りつつある。そして我々の国の状況が今まで以上に、人種の多様性や関係、そして人格を深く、そして広く研究することを必要としている。しかしこの研究は最初から行わねばならず、純粋に抽象的な科学として扱われねばならない。いかなる理由や動機であっても、宗教的なもの、あるいは何かのドグマに従ったり、主義に従うような人による研究であってはならない。このような要素が科学的探究において少しでも低下することは、ある意味この民族学会を滅ぼすことになる。この学会のメンバーの誰かの機嫌を損なうことなく人間の同一性について論じることができなかった頃、人間の同一性を語り始めたとき、感情的な反論が飛びかかった頃を覚えている記者はいることだろう。このことをここで述べる理由は、科学的探究の前にはどんな信条も排除しなければならないという重要な真実を改めて述べたいからである。過去にそうしなかったために、この学会での議論は比較的穏やかであったが実りがなかった。

ボアズはこの学会がたどってきた変遷のまとめを以下の言葉で締めくくった。

このようにしてこの学会は我々の国の文化人類学的研究の活発なメンバーとなった。今後も文化人類学の研究に活発に携わり、学会のメンバーの研究がこの分野に貢献し、活動を通してこの時代の難しい社会問題を解決することを願うものである。

1942年12月29日にボアズはコロンビア大学の教員クラブで昔馴染みのポール・リベット氏のための昼食会を開いた。彼はワイン・グラスを手にしてこう言った。「人種に関して新しい理論を思いついた……」そして後ろに倒れて亡くなった。

ルース・ベネディクトは文化人類学者として、そして一市民としてこの世の中でどのような役割を果たすべきかを指導してくれる良き先輩を失ってしまったのである。

#### 注

- 1) 未発表の手紙
- 2) 未発表の手紙
- 3) 1923年の日記参照。日記のなかの2月12日-20日、65-66ページ
- 4) *Review of Religion* 4巻4号、1940年、438-440ページ
- 5) この手紙はルース・ベネディクトからフランツ・ボアズへの1923年9月16日の手紙。本文の399-400ページ参照

- 6) 未発表でフランツ・ボアズからルース・ベネディクトへの手紙
- 7) ボアズ文書になかの未発表の手紙。
- 8) この心配はもしかすると、早計であったかもしれない。1952年に開催されたバーナード財団の文化人類学に関する国際シンポジウム参照、〔アルフレット・クローバー編集の*Anthropology Today*、1953年シカゴ大学出版〕1920年代に私たちは学会によってすばやく、様々なレベルで交流を持つことをまだ発見していなかった。その頃、ある分野に精通しているということは、時間と興味があるということで、その分野の知識を手に入れる方法は、読書による方法だった。つまり、その分野のなかで育ったのなら、精通するのは当たり前だが、年取ってある分野に精通することはより困難であった。
- 9) スタンレーもルースも再婚することはしなかった。スタンレーが亡くなった時、彼は自分の遺産を信託預金に入れて、彼女に残した。
- 10) この本の原稿の準備は、1932年に始まった。マーガレット・ミードとルース・ベネディクトの書簡1932年から1934年のなかに散見することができる。
- 11) *General Anthropology* でフランツ・ボアズ編集のテキストは1928年に始まり、10年にも及ぶ長きにわたる仕事となった。
- 12) 1932年設立
- 13) これはモンタナ大学とコロンビア大学共同で主催された。
- 14) ニューヨークのModern Age Booksから1940年に出版
- 15) Public Affairs 広報局のパンフレットNo. 85で、広報委員会により1943年に出版された。
- 16) ラルフ・リントンによる*Acculturation in Seven American Indian Tribes*、ニューヨーク、アップルトン・センチュリーにより出版、1940年
- 17) *Science, Philosophy and Religion* のシリーズ参照、ライマン・ブライトソンとルイ・フィンケルスタインによって編集。科学・哲学・宗教学会により出版。
- 18) 国家倫理委員会（Committee for National Morale）は、現在「行動科学」と呼ばれるものを戦争で利することを考える委員会で、その中心的メンバーは第一次世界大戦で心理学の応用を考えていた人たちである。後に心理戦で大きな役割を果たし、倫理問題に関わった人たちはこの委員会にボランティアとして集結し、戦争が始まった時に実践で役立つための準備をした。ゴードン・アルポートとともにラディスラス・フェラーゴは、*German Psychological Warfare*（ニューヨークのプットナム社出版、1942年）という包括的な研究書を著し、エドモンド・テイラーは、この委員会で彼の関心を発展させ、*Richer by Asia*（ボストン、ニューヨーク、ホートン・ミフリン社出版、1947）を書いた。私たち（訳者注：マーガレット・ミードとグレゴリー・ベイトソン）は論文“Principles of Moral Building”（*Journal of Educational Sociology* 15、4号、1941年、206-220）で倫理の問題を扱った。国家倫理委員会は異文化関係協議会（Council for Intercultural Relations）とともにジェフリー・ゴラーのバイオニオ的考察“Japanese Character Structure and Propaganda: a Preliminary Survey”「日本人の性格構造とプロパガンダ：初期研究」を援助し、その一部は“Themes in Japanese Culture”「日本文化のいくつかの主題」として出版された。
- 19) Conference on Science, Philosophy and Religion が倫理問題の学際的アプローチを強調し、Committee on Nation Morale は社会科学的方法の応用を強調したのに対し、Council for Intercultural Relations は現在「国民性」と呼ばれるものの研究を始めた。その研究のために非常に教養ある人たちをインタビューし、彼らの文化について質問し、同時に私たちが研究している文化圏外に住んでいる人たちをインタビューした。また映画を分析する方法を開発した。これらは後に文化の遠

- 隔調査に取り入れられるようになった。マーガレット・ミード、ローダ・メトロ編集による *The Study of Culture at a Distance* 参照。
- 20) この報告書は *Science, Philosophy and Religion* の二回目のシンポジウム論文集 (ライマン・ブライソン、ルイズ・フィンケルスタイン編集) に掲載。ベネディクトの書評は前掲書の 69-71 ページ参照
  - 21) この報告書はグレゴリー・バイトソン、ルース・ベネディクト、ライマン・ブライソン、ローレンス・K・フランク、マーガレット・ミード、フィリップ・E・モスリー、ルイズ・M・ローゼンブラットによって *Suggested Materials for Training of Regional Specialists, Army Program* のために書かれた。1943年に謄写版印刷された。
  - 22) ナチ・フィルムである *Hitlerjunge Quex* の分析。《ニューヨーク、インスティテュート・フォー・インターカルチュラル・スタディーズ、1945年、謄写版印刷》この分析の一部は“Cultural and Thematic Analysis of Fictional Films”「フィクション・フィルムの文化的・テーマ的分析」として *Transaction*、ニューヨーク・アカデミー・オブ・サイエンスのシリーズ2、5、ナンバー4として1943年出版、72-78 ページ
  - 23) *Burmese Personality*、ニューヨーク、インスティテュート・フォー・インターカルチュラル・スタディーズ、1946年、謄写版印刷
  - 24) “Quantitative Attitude Analysis—A Technique for the Study of Verbal Behavior.” 1941-1943年の報告書、*Nation Research Council Bulletin*, 108、ワシントン、1943年
  - 25) ニューヨーク・モロー社『火薬をしめらせるな』
  - 26) その成果の例としてマーガレット・ミードによる論文“The Application of Anthropological Techniques to Cross-National Communication”、*Transaction*、ニューヨーク・アカデミー・オブ・サイエンスのシリーズ2、4、ナンバー4として1947年出版、133-152 ページ参照
  - 27) *Rumanian Culture and Behavior*、ニューヨーク、インスティテュート・フォー・インターカルチュラル・スタディーズ、1946年、謄写版印刷
  - 28) *Thai Culture and Behavior: An Unpublished War Time Study Dated September, 1943* (Data Paper, No. 4, Southeast Asia Program, Department of Far Eastern Studies, Cornell University, 1952) これは *Thai Culture and Behavior* としてそれ以前に謄写版刷りの形で New York, Institute for Intercultural Studies から1946年に出されていた。
  - 29) ベネディクトからボアズへの手紙、未発表
  - 30) フランツ・ボアズによる論文“The American Ethnological Society”『サイエンス』97、1月1号 (1943年) 7-8 ページ